

日本在住コリアンにおけるバイリンガリズム

—コミュニティの背景と運用上の特徴を中心に—

● 吉田 さ ち

1. はじめに

日本に在住するコリアンは、来日した時期により「オールドカマー (Old Comer)」と「ニューカマー (New Comer)」に分けられる。移住者集団においては、世代の進行とともに「言語交替 (language shift)」が進むと言われており¹、日本在住コリアンにおいても例外ではない。

本稿では、日本在住コリアンの来日時期・世代と言語運用上の特徴にどのような関わりがあるのかについて先行研究を踏まえて整理したうえで、今後の研究の射程について論じる。

2. コミュニティの背景

2-1. 日本在住コリアンの定義

本稿では、日本国内で生活している韓国籍・朝鮮籍の人々を「日本在住コリアン」と呼ぶこととする。本章では、日本在住コリアンの人口統計学的な属性について概観する。

法務省 (2018) によると、日本在住コリアンの人口は2017年末現在約48万人であり、中国籍の人々に次いで多い。帰化等によって日本国籍を持つことになった人々を含めると、100万人を超えるとも推定されている (徐京植 2012)。

彼らを来日時期により分類すると、次の表1のようになる³。

表1. 来日時期による分類²

オールドカマー (Old Comer)	日本が朝鮮半島を植民地にしていた時代 (1910~1945) 前後に来日した人たちとその子孫。
ニューカマー (New Comer)	近年になってビジネスあるいは結婚、留学などのために来日した人たちとその家族。

オールドカマーは、日本が朝鮮半島を植民地にしていた時代 (1910~1945) 前後に来日した人たちとその子孫と定義される。一世の数は年々減少し、四世、五世まで世代が進んでいる。在日本大韓国民団によると、オールドカマーの世代構成は、一世が5%、二世が約41%、三世が約45%、四世が約9%と推定されている。

ニューカマーは、近年になってビジネスあるいは結婚、留学などのために来日した人たちとそ

1 渋谷 (2005) は「成人移住者の場合には、ハワイの日系人の例に見るように、言語交替は典型的には3世代にわたって行われ、2世はバイリンガル、3世は移住先の言語のモノリンガルになることが多い」と述べている。

2 定義は、生越 (2005) による。

3 表では、2つのグループに大別されているが、戦後からニューカマーの来日が始まる時期まで、同郷者や親族の呼び寄せによって、あるいはオールドカマーとの結婚によって継続的に来日した人々が存在する (金美善 2009)。

の家族と定義される。ニューカマーの来日時期は、1980年代以降などと定義されることが多い。これは日本の円高や韓国の海外渡航の自由化（1989年）等の時期と重なる。1980年代は、特にアジア諸国からの外国人労働者が増えた時期でもある⁴。

2-2. 在留資格

次に、彼らの在留資格について整理する。オールドカマーの主な在留資格は、「特別永住者」である。「特別永住者」とは、「第二次大戦以前から日本に住み、昭和27年（1952）サンフランシスコ講和条約により日本国籍を離脱した後も日本に在留している台湾・朝鮮半島出身者とその子孫」（松村 2012）を指す。2018年現在の「特別永住者」の人口は、総人口の67.7%を占める。

一方、ニューカマーの在留資格は、「永住者⁵」、「技術・人文知識・国際業務⁶」、「留学⁷」、「日本人の配偶者等⁸」、「家族滞在⁹」などと多様である。

2-3. 居住地

日本在住コリアンの居住地の多い都道府県と、各都道府県における「特別永住者」の数を示したのが表2¹⁰である。

表2. 総数に占める「特別永住者」の割合

総数順	都道府県	「特別永住者」数 (%)	総数
1	大阪府	79,989人 (78.3%)	102,147人
2	東京都	37,469人 (40.5%)	92,550人
3	兵庫県	35,350人 (87.5%)	40,384人
4	愛知県	24,268人 (79.8%)	30,397人
5	神奈川県	15,517人 (55.4%)	28,030人
6	京都府	20,786人 (85.5%)	24,312人

表2によると、日本在住コリアンは、近畿地方や関東地方に集中していることが分かる。そのうち、兵庫県、京都府、大阪府等の近畿地方において、「特別永住者」の割合が特に高くなっている。近畿地方に「特別永住者」であるオールドカマーが多い理由として、金美善（2000）は、1920年代に済州島と大阪間の定期航路があったため、地縁・血縁を頼りに、大阪に移住する人が

4 山脇（2005）は「1980年代には、日本企業や観光客の海外でのプレゼンスの増大や、円高などの経済的要因を背景に、近隣アジア諸国からの出稼ぎ労働者が急速に増加し」と述べている。

5 特別永住者との対比で「一般永住者」と呼ばれることもある。在留期間は無期限である（法務省 2018）。

6 機械工学等の技術者、通訳、デザイナー、私企業の語学教師、マーケティング業務従事者等が該当する。在留期間は、3ヶ月～5年である（法務省 2018）。

7 大学、短期大学、高等専門学校、高等学校、中学校、小学校等の学生・生徒。在留期間は、4ヶ月～4年3ヶ月である（法務省 2018）。

8 日本人の配偶者・子・特別養子。在留期間は6ヶ月～5年である（法務省 2018）。

9 在留外国人が扶養する配偶者・子。ただし、永住者の配偶者・子は「永住者の配偶者等」という在留資格を持つ。在留期間は、3ヶ月～5年である（法務省 2018）。

10 在留資格と都道府県の集計表は、韓国籍のデータのみを入手できたため、表2の総数および「特別永住者」数は、韓国籍の人数である。

増加したと述べている。

集住地（コリアン・タウン）として有名な地域としては、大阪府生野区や東京都新宿区大久保地区が挙げられる。大阪府生野区は、オールドカマーによる集住地であり、2018年現在、韓国・朝鮮籍の人口は区の人口の約17%を占めている。東京都新宿区大久保地区は、ニューカマーの集住度が高い。新宿区（2018）の統計資料に基づくと、2017年現在、大久保地区住民の4割前後が外国人であることが分かる。

2-4. 出身地

金美善（2000, 2005a）によると、オールドカマーにおいては、慶尚道、全羅道、済州島など、朝鮮半島の南部地域の出身者が多い。1960年代の統計では、南部地域出身者が全体の約97%を占めると言われている。一方、ニューカマーの出身地はソウルをはじめとする各地であり、特定の地域への集中は見られない。

後述するように、オールドカマーにおいては、出身地の方言語尾が日本語に加えられる現象や二世以降の残存語彙に方言形式が残っていること等が指摘されている。一方で、ニューカマーの言語運用において、方言の影響が現れるかについては明らかにされていない。

3. オールドカマーの言語運用

3-1. 言語交替の状況

これまでの研究を通して、世代交代するとともに韓国語から日本語への言語交替（language shift）が進んでいることが指摘されている（生越 2017）。コミュニティ内部の使用言語としては、日本語と韓国語のバイリンガルから、日本語のみのモノリンガルに変わってきている。民族学校等を除くと、日本生まれの世代はモノリンガル化が特に顕著であることが指摘されている（生越 2017）。

次節以降では、世代別の言語運用の特徴について概観する。

3-2. 一世の言語運用

金美善（2005a）は一世の言語運用の特徴について、以下の4点を指摘している。

- (1) 集住地では、両言語を混用した言語運用が見られる。
- (2) 韓国語：出身地の方言（慶尚道，全羅道，済州島）が見られる。
- (3) 日本語：音韻・文法・語彙全般に母語の干渉が見られる。
- (4) 日本語を自然習得した1世には、独自の習得ストラテジーが存する。

(1)の両言語を混用した言語運用として、生野区一世では「チャンボンマル」と呼ばれる、韓国語と日本語を混用したことが用いられているという（金美善 2000）。以下の〔発話1〕は、「チャンボンマル」の例である。

〔発話1〕 장군이라서 뭘 할건가 거, 意味がない。

（王手なのに、どうするの、それ意味がないよ）（金美善 2000）

(2)の出身地である南部地域の方言が影響した例として、金美善（2000）は、済州島の方言語

尾「게」を日本語の命令文に付加する発話を挙げている。「게」の本来持つ機能である「命令の催促機能」のみならず、「発話における意味の強調機能」という一世独自の用法も確認されたと述べられている。

(3)の日本語への母語の干渉については、母語の音韻体系の影響や漢語語彙の単純化、文化的語彙の借用、「やる」「くれる」の混同などが見られたという(金美善 2000)。

(4)の独自の習得ストラテジーには、動詞活用の簡略化が挙げられている(金美善 2000)。

オールドカマー一世の日本語には、韓国語の音韻体系の影響等、ニューカマーの日本語と共通すると思われる特徴もある一方、独自の特徴も存在する。一世独自の特徴として、動詞活用の簡略化が挙げられるが、動詞活用の簡略化は、一世が自然習得で日本語を習得したことと関わりがある。また、方言語尾「게」の付加は、済州島出身者の一世の間で確認された現象である。

3-3. 二世以降の言語運用

オールドカマーの二世と三世を対象に、日常生活で使用されている韓国語について記述した金由美(2005)は、インフォーマントの二世と三世において、単語レベルで韓国語が残存していることを明らかにした。

二世以降に保持されている語彙には、親族名称・呼称、チェサ(法事)に関する語彙、食生活に関する語彙などがあり、全体的に非標準形式が多くみられたという(金由美 2005)。

注目されるのは、二世以降に保持されている語彙においても、インフォーマントの二世の親である一世の出身地の方言(慶尚北道方言)の影響が現れている点や、単語や句の内部で韓国語と日本語の混用が見られた点である。一世の使っていた方言や混合コードが、二世以降の語彙にも引き継がれているのが分かる。

3-4. 総聯系民族学校(朝鮮学校)の言語運用

日本在住コリアンの民族学校は、在日本朝鮮人総聯合会(以下「総聯」)系の学校と韓国系の学校に分けられる。生越(2017)によると、総聯系の学校が63校、韓国系の学校が6校ある。

総聯系民族学校(「朝鮮学校」)では、「総聯朝鮮語」「在日朝鮮語」等と呼ばれる言語変種が用いられていると指摘されてきた。植田(2001)は、「総聯朝鮮語」について、「民族学校を中心に『総聯』の各機関内やその構成員の間で行われている、主として民族教育によって習得された朝鮮語」と定義している。

総聯系民族学校で用いられる言語変種について、伊藤(1989)、月刊イオ編集部(2000)、申(2005)宋(2013)、渡邊(2018)等は次のような特徴を持つと述べている。

- (1) 話しことばにおいて、書きことば的な表現を用いる。
- (2) 日本語の干渉を音韻・文法・語彙など全般的に受けている。
- (3) 北朝鮮式の表記・発音や、独自の語彙を使用している。
- (4) コード・スイッチングが見られる。

(1)と(3)については、総聯系民族学校での教育の内容等が反映された特徴だと考えられる。

(2)の日本語の干渉については、日本語を母語とする韓国語学習者に共通して見られる特徴である。

(4)のコード・スイッチングについては、以下の[発話2]～[発話7]のような発話が報告

されている。[発話2]～[発話4]は、総聯系民族学校の生徒の発話である。[発話2][発話3]は、韓国語を基盤にした発話に日本語の外来語や終助詞を挿入したもの、[発話4]は日本語を基盤にした発話に韓国語の名詞を埋め込んだものである。

[発話2] 커뮤니케이션하는 방법이 어렵게 되는가나라고 생각했다. (申 2001)
(コミュニケーションする方法が難しくなるのかなと思った。)

[発話3] 그러나 그 사람들도 마니악이다よね? (申 2001)
(しかし、その人たちもマニャックだよね?)

[発話4] 학교에 선생님 오るかなあ? (申 2001)
(学校に先生おるかなあ?)

次の、[発話5]～[発話7]は、総聯系民族学校の三世の教員の発話として記述されたものである。

[発話5] 강원도 북쪽쪽입니다ね. 잘 모릅니다. (宋 2013)
(江原道の北のほうですね。よく分かりません。)

[発話6] ○○○、ああいう風にしゃべったら 안 됩니다. (宋 2013)
(○○○、ああいう風にしゃべったらいけません。)

[発話7] 그것도 시골의 시골. もう、산속. 평~장한 산속. (宋 2013)
(それも田舎の田舎。もう、山の中。すんーごい山の中。)

上記の[発話5]～[発話7]では、韓国語が基盤となる発話に、日本語の終助詞や従属節、副詞等が挿入されている。

「総聯朝鮮語」には、話者の年齢、世代、職業、学校等によって多様性があると推測される。例えば、生徒と教員のコード・スイッチングの発話には共通した特徴、異なる特徴がある可能性がある。教員の使用する言語は、児童・生徒の模範にもなることから、児童・生徒に比べ、日本語を混用する割合は低くなるかもしれない。また、相手との関係性によってもコード・スイッチングの様相は変わってくるだろう。同じバイリンガルの話者同士で、親しい間柄ほど、コード・スイッチングが行われやすいものと予想される。また、発話の場面によっても変わるだろう。授業中よりも、休み時間や放課後などにコード・スイッチングが行われやすいだろう。

話者の属性、聞き手との関係、場面などにより、どのような違いが見られるのかについても今後明らかにしていく必要があると思われる。

3-5. まとめ

オールドカマーの言語運用について、世代により運用上の特徴が異なることが明らかにされてきた。まず、一世においては、日本語と韓国語のバイリンガルであり、集住地において二言語の混用が広く確認されている。

二世以降では、日本語のモノリンガル化が進んでいる。家庭内で保持されている文化や習慣に関する語彙は、残存しやすいことが分かっている。

三世以降は母語が日本語にシフトしている。ただし、民族学校の生徒や教員などの構成員に限っては例外的で、構成員の間で用いられている変種が存在することが指摘されている。

4. ニューカマーの言語運用

4-1. 言語使用の状況

金美善（2009）によると、ニューカマーの一世には、日韓バイリンガル、韓国語モノリンガルの両方が存在するという。オールドカマーの一世が当時の日本社会で生活するため、母語の韓国語に加えて日本語の習得を余儀なくされてきたことは対照的である。

次の表3は、韓国人留学生を対象に、日常的なドメインについて、接触する相手と使用する言語を質問紙で問うた結果をまとめたものである。

表3. 接触度と言語使用度によるドメインの分類（吉田 2013）

		接触度	
		韓国人>日本人	日本人>韓国人
言語使用度	韓国語>日本語	休日、宗教、生活全体	
	日本語>韓国語	学校 近所(接触度は韓≒日)	職場 普段行く店

韓国人と接触する割合が高く、韓国語を使用する割合が高いドメインは、休日、宗教、生活全体である。つまり、休日や教会など私的な領域で韓国人との社会的ネットワークが形成され、韓国語が使用されていることが分かる。

一方、職場や学校などでは、日本語使用に傾きがち傾向があることが分かる。つまり、ニューカマーの母語保持には、休日や教会¹¹など私的な領域において、いかに韓国人との社会的ネットワークを構築・保持するかという点が関わっているのである。

4-2. ニューカマーの言語運用

ニューカマーの言語運用の特徴として、次の2点が挙げられる。

- (1) 韓国語：学校教育で習得した現代の標準語が中心である（金美善 2005）。
- (2) コード・スイッチングが見られる。

(1)の韓国語については、標準語だけを使用しているのではなく、標準語と出身地の方言を相手や場面により使い分けているというのがより実情に近いだろう。なお、ニューカマーの日本語については、オールドカマーとは対照的に教室習得した標準語が中心となる。ただし、日本での居住地の方言も使用することがあると考えられる。

(2)のコード・スイッチングについては、韓国系民族学校、留学生などにおいてコード・スイ

11 ベーカー（1996）は、「宗教は多数派・少数派言語を維持する上で強力な手段になりうる」と述べている。

ッチングが観察されている。韓国系民族学校の生徒の間では、来日時期により、コード・スイッチングのタイプ（挿入型・交替型）が異なることが明らかになっている（吉田 2005）。来日時期が早いほど、交替型のコード・スイッチングが増え、文間・文内のさまざまな位置で言語が切り替えられる傾向がある。これは世界の移民集団に共通する特徴（Singh & Backus 2000等）でもある。

次の〔発話8〕・〔発話9〕、〔対話1〕・〔対話2〕は、韓国系民族学校の生徒のコード・スイッチング発話である（吉田 2005）。〔発話8〕〔発話9〕は、臨界期以後に来日した、韓国語が優勢な生徒による発話である。韓国語を基盤とする発話において、日本語の単語が挿入されている。

〔発話8〕 선생님한테도 相談해 봐야지. (吉田 2005)

(先生にも相談しないと。)

〔発話9〕 나는 왜 이렇게 말할 때 寒い할까. (吉田 2005)

(私はどうしてこう話すとき寒いんだろう?)

一方、次の〔対話1〕、〔対話2〕は、臨界期以前に来日した、二言語の能力がともに高い生徒同士の対話である。これらの対話では、日本語と韓国語を文内・文間のさまざまな位置で交替させるタイプのコード・スイッチングが確認できる。

〔対話1〕

A: ね, 자기소개서 (自己紹介書) ってさー, お父さんに見せる?, 書いてから.

B: ㄱ, 엄마한테는-, <응응응응> 보여 주는데, 아빠한테 안 보여 줬어. (だから, お母さんにはくうんうんうんうん見せるけど, お父さんには見せなかった。)

A: なんか, お父さんが, 超, “見せろ, 見せろ” って <へー> 言いまくってて-, 今, あの, 한 번 썼잖아 (一回書いたじゃん)?, うちー.

B: うん.

A: 書いて-, それで, 国語の先生に直してもらって-, あん, 별로 고칠 게 없었다. (別に直すところなかったんだ。) <うん> で, あんじゃ, 선생님 해 주면 (先生やってくれたら) いいじゃーん?. それで, あの, 後ろの方を, 아예 내용을 바꾸라고 내가……. (最初から内容を変えろって, 私が…….) (吉田 2005)

〔対話2〕

(1) ぬす, でもねー, なんか, 妹は-, あんまり, 家族, てか,

엄마한테 혼 나면은-, <응응응응> 짜증 내고 그래두-, まだ, なんか, あいつはね, <あ> 家族を愛する気持ちが, (<笑い>)あるんだよ。私よりは, あると思う。なんか, 어디 놀러 가도 <응응응응>, なんかさー, 私は-, 여름 방학 놀로 못 가잖아-? (吉田 2005)

(ぬす, でもねー, なんか, 妹は-, あんまり, 家族, てか, お母さんから怒られると-, <うんうんうんうん>腹を立てたりするとしても-, まだ, なんか, あいつはね, <あ> 家族を愛する気持ちが, あるんだよ。私よりは, あると思う。なんか, どこに遊びに行ってもくうんうんうんうん-, なんかさー, 私は-, 夏休み遊びに行けないじゃない?)

留学生の会話では、主に韓国語が使用される。コード・スイッチングが含まれる発話では、[発話10]・[発話11]のように、韓国語が基盤の発話に日本語を挿入タイプのコード・スイッチングが行われていた(吉田 2013)。これは臨界期以後に来日した生徒と共通した特徴である。

[発話10] 그러니까 막 더 스트레스를 나 혼자 그거를を抱える하는거지. (吉田 2013)
(だから、やたらにもっとストレスを私ひとりでそれを抱えるんでしょう。)

[発話11] <笑いながら> 그래가지고 (<笑い>), 그날은 근데 내가 눈 뜨거서는, <舌打ち> “おまえ、やばい、やばいよ” 이러면서 (<笑い>), 다시 먹지 말아야지 이러면서 잤는데 이미 때는 늦었지. (吉田 2013)

(それで、その日は、目をあけては、「おまえ、やばい、やばいよ」って言って。もう食べないようにしないと寝ただけ、もう手遅れでしょう。)

4-3. まとめ

本章では、ニューカマーの言語運用上の特徴について、コード・スイッチングを中心に概観した。オールドカマーとは出身地や習得環境が異なるため、集住地のオールドカマー一世の間で見られたような出身地の方言の日本語への付加や、動詞の活用の簡略化等は、ニューカマーにおいては、これまで確認されていない。オールドカマーに見られたコード・スイッチングは、ニューカマーにおいても韓国系民族学校等において観察されている。来日時期や言語能力によって、コード・スイッチングのタイプが異なることが明らかになっている。

5. 今後の研究の展開

日本在住コリアンの言語運用に関するこれまでの研究では、オールドカマー一世、総聯系民族学校の生徒、韓国系民族学校の生徒等、特定の集団を対象とし、当該集団における言語運用上の特徴についての記述が行われてきた。

これまでの研究により、各集団の言語運用上の特徴についての知見が蓄積されてきた。その一方、コミュニティ内部での異なる属性を持つ集団同士の言語接触到に焦点を当てた研究は少ない。

この点を踏まえて、今後の研究の展開として考えられるテーマとその意義について論じる。

(1) ニューカマーとオールドカマーの言語接触

第一に、ニューカマーとオールドカマーの言語接触に関する研究が挙げられる。ニューカマーが日本に定着するに従い、ニューカマーとオールドカマーの言語接触も増加していくものと思われる。すでに、言語景観に関する研究では、ニューカマーとオールドカマーの言語接触により、大阪府生野区の言語景観に変化がもたらされていることが指摘されている(金美善 2005b)。

オールドカマーとニューカマーとの間の談話においては、どのような接触現象が見られるのだろうか。例えば、「総聯朝鮮語」の話者とニューカマーの話者が会話する際、どのような変種が選択されるのだろうか。話者の持っているスピーチ・レパートリーの中から、どの変種が選ばれるのか。

スピーチ・アコモデーション(speech accommodation)理論を用いて、一方の変種にコンバージェンス(convergence, 集中)するのか、それともダイバージェンス(divergence, 逸脱)するのか等について考察することが可能だと思われる。

(2) 集団内での世代間コミュニケーション

オールドカマーの集団内部やニューカマーの集団内部において、異なる世代間でコミュニケーションする際に、どんな言語変種がどのように用いられているのか、あるいは、どのような言語問題が生じるのか、といった視点による研究も可能だろう。

移住者集団においては、世代によって母語や使用言語が異なる。異世代間の談話で生じる言語問題や言語管理の方法について明らかにすることで、他の移住者集団における世代間コミュニケーションの問題解決に役立ちうる。

(3) ニューカマーとオールドカマーの言語交替についての比較・検証

ミクロな談話レベルだけでなく、マクロなレベルにおいて、ニューカマーの言語交替の様相が、オールドカマーのそれとどのような違いを見せるのかについても検証していく必要がある。母語の保持には、地位の要因、人口の要因、制度的支援の要因が関わると言われる (Giles, Bourhis & Taylor 1977)。例えば、言語の地位についてみると、オールドカマーの一世の時代とニューカマーの一世の時代で様変わりしたと言える。二国間の関係等の不安定な要素は常に存在するものの、2000年代以降の韓流ブームは韓国文化が日本に浸透するきっかけとなったのも事実だ。地位・人口・制度的支援の各要因が、オールドカマーとニューカマーとでどのように異なるのかを踏まえて、それらの要因が言語シフトの様相・速度にどのような影響を与えるのかについて分析することは移住者集団の言語シフトの一般理論構築の一助になりうる。

(4) 日本語との言語接触

先に述べたように、ニューカマーの流入により生野区の言語景観に変化がもたらされたことが明らかになっている。また、吉田 (2018) は、新宿区大久保の竹下通り周辺に見られる多言語景観を調査し、日本人客向けの言語表示が盛んであることを指摘している。つまり、ニューカマーの流入や韓流ブームの影響で、集住地の言語景観は変化しつつある。その影響は、集住地の言語表示にとどまらない。商品パッケージ等さまざまな媒体でハングル表記や韓国語のかな表記が現れている。韓国語の語彙が新たに流入することにより、外来語として定着する語彙が増加する可能性もある。日本語への韓国語の語彙の流入と「外来語」としての定着についての知見は、多言語社会化する日本における言語変化を捉えるうえで有益な情報となると考えられる。

参考文献

- 伊藤英人 (1989) 「在日朝鮮人によって使用される朝鮮語の研究の必要性について」『日本語の多言語使用についての実態調査』、私家版
- 任栄哲 (1993) 『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』、くろしお出版
- 植田晃次 (2001) 「『総聯朝鮮語』の基礎的研究 - そのイデオロギーと実際の重層性 - 」『「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み』、三元社
- 生越直樹 (2005) 「在日コリアンの言語使用意識とその変化—ある民族学校でのアンケート調査結果から—」『在日コリアンの言語相』、和泉書院
- 生越直樹 (2017) 「在日コリアンの言語使用の実態とその背景」『多言語主義社会に向けて (平高史也・木村護郎クリストフ編)』、くろしお出版
- 金美善 (2000) 『日本在住コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究—大阪市生野周辺をフィールドとして—』大阪大学大学院文学研究科日本専攻、平成12年度博士学位申請論文

- 金美善 (2005a) 「在日韓国・朝鮮人の言語使用」『事典 日本が多言語社会』、岩波書店
- 金美善 (2005b) 「言語景観に見える在日コリアンの言語使用—新来者の登場がもたらしたもの—」『在日コリアンの言語相』、和泉書院
- 金美善 (2009) 「朝鮮総連系民族学校のバイリンガル教育」『移民とともに変わる地域と国家』、国立民族学博物館調査報告
- 金由美 (2005) 「残存韓国語語彙の様相—ある在日2・3世の場合—」『在日コリアンの言語相』、和泉書院
- 月刊イオ編集部 (2000) 「特集 ここが変だよ『在日朝鮮語』」『月刊イオ』No.046、朝鮮新報社
- 在日本大韓国民団「在日同胞社会」(URL: <http://www.mindan.org/syakai.php>)
- 渋谷勝己 (2005) 「言語交替・維持・喪失」『事典 日本が多言語社会』、岩波書店
- 申昌洙 (2001) 「総連系日本在住コリアン2世以降の世代の言語意識とことばの使いわけ」第8回社会言語科学会研究大会ワークショップ配布資料
- 申昌洙 (2005) 「民族学校の歴史と朝鮮学校における朝鮮語教育」『在日コリアンの言語相』、和泉書院
- 徐京植 (2012) 『在日朝鮮人ってどんな人?』、平凡社
- 宋基燦 (2013) 「在日朝鮮人の朝鮮語教育、その実態と意味—朝鮮学校の言語実践を中心に—」『言葉のなかの日韓関係』、明石書店
- 藤井幸之助 (2005) 「韓国・朝鮮人」『事典 日本が多言語社会』、岩波書店
- 松村明 (監修) (2012) 『大辞泉第二版』、小学館
- 吉田さち (2005) 「二言語の能力とコード・スイッチング—韓国系民族学校の高校生を対象として—」『社会言語科学』8-1、社会言語科学会
- 吉田さち (2013) 『日本在住コリアンのニューカマーにおける二言語併用』東京大学大学院総合文化研究科
- 吉田さち (2018) 「新宿区大久保地区のコリアン系店名看板についての一考察」『コミュニケーション文化』第12号
- 渡邊香織 (2018) 「ドキュメンタリー映画から見る在日朝鮮語の特徴」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』327
- Giles, H. Bourhis R. & Taylor, D. (1977) Towards a Theory of Language in ethnic group relations. In H. Giles (ed.) Language, Ethnicity and Intergroup Relations. London: Academic Press.
- Singh, R., & Backus, A. (2000) Bilingual Proficiency and Code-switching / Mixing Patterns. In Singh, R., (ed.) The yearbook of South Asian Languages and Linguistics, 2000. New Delhi: Sage.